イマジン、イマジナリーボーイフレンズ

仲村ゆうな

あらすじ

西崎花には十年間愛する人がいる。中学生の時出会ってから、後にも先にも花が愛するのはあっくんだけ。だがその恋はあっくんの浮気によって終わった。

絶望に打ちひしがれる花の前に十三歳、十七歳、二十二歳のあっくんたちが現れる。あっくんへの未練が花に妄想を見させるのだ。

唯一の友人、かにちゃんのアドバイスに従い、あっくんを忘れようとマッチングアプリに勤しむが、失敗ばかり。だがついにアプリであっくんそっくりな男性と出会う。花は猛アプローチ。しかし交際直前で、相手の嫌なところばかり目につくようになる。急激に冷めてしまった花。思えばあっくんにも同じようなところがあったと思っ

た時、妄想の二十二歳のあっくんは姿を消す。

アプリを辞めた花は、コンビニで高校生アルバイトに声をかけられる。未成年は恋愛対象にならないが、真っ直ぐな思いを無碍にできない。だが夢ばかり語る彼に幼さを感じる。それは高校時代のあっくんの姿と重なった。あっくんは社会を知らないただの子供だったなと思った時、妄想の十七歳のあっくんは姿を消した。

妄想のあっくんが次々と姿を消すものの、いつまでも未練を捨てきれない花。電話で相談するかにちゃんとは口論になり思わずスマホを投げるが、電話は繋がっていなかった。かにちゃんも花の妄想だったのだ。あっくんのことしか考えていなかった花に友人などいるはずもない。

花は偶然学童バイトの時の子供と再会する。中学生になった彼の好きな子の話を聞いているうちに、あっくんと出会った頃を思い出す。ある思いを抱え、十三歳のあっくんと共に、花はあっくんに会うことを決意する。

久々に会ったあっくんはブラック企業に勤めており覇気がなく、付き合っていた頃の雰囲気とは違っていた。復縁を迫られ、花はようやく目が覚める。

あっくんとの十年間に決着をつけた花。新しい彼氏に笑顔で元彼あっくんの悪口を吐くのだった。

登場人物表

西崎花（13～23）　会社員
あっくん（13～23）　花の元彼

あっくん（22）　花の妄想
あっくん（17）　花の妄想
あっくん（13）　花の妄想

かにちゃん　花の相談相手

ゆう（22）　大学生
三村龍磨（17）　高校生
髙橋斗真（13）　中学生

男
彼氏

○マンション・花の部屋（夜）

ベッドの上で男に押し倒されている西崎花（23）。

男「よ、用事あるんだった！」

花「え」

男、慌ててベッドから起き上がる。

花、起き上がる。

急いで身支度をする男。

男「（ひきつった顔で）じゃあ」

男、ポケットからマスクを取り出し耳にかけようとする。

が、勢い余ってゴムが取れる。

男「じゃあ」

男、手でマスクを抑えたまま玄関に走っていく。

花「……」

ガチャガチャと騒がしく男が出て行く。

花、ため息をつく。

ベッドに寝転がる。

あっくん（22）の声「花」

花、振り返ると、リクルートスーツを着てマスクを付けているあっくん（22）、立っている。

あっくん（22）「だからお前はダメなんだ」

あっくん（17）の声「花たん」

花、寝返りを打つ。

と、目の前にはブレザー姿のあっくん（17）が寝転がっている。

あっくん（17）「しょんぼりしてる顔もかわちいよ」

あっくん（13）の声「花ちゃん」

花、寝返りを打つ。

と、目の前には学ラン姿のあっくん（13）が寝転がっている。

優しく微笑むあっくん（13）。

花「……あっくん」

○タイトル

『イマジン、イマジナリーボーイフレン

ズ』

○マンション・花の部屋

かにちゃん（声）「まーた逃げられたの？」

スマホを耳に当てている花。

花「逃げられたって言い方やめてよー。用事あったんだって」

かにちゃん（声）「絶対嘘じゃん」

花、スマホを耳に当てたままレンジのスイッチを押す。

かにちゃん（声）「どうせ変なこと話したんでしょ」

花「話してないよ？　私はただ、私には十年愛した人がいて、死ぬまで一緒にいるつもりだったんだけど」

かにちゃん（声）「重い重い重い。アプリで出会った人にそれは重いよー。みんな軽い恋愛したくてやってるんだから」

花「そんなー」

かにちゃん（声）「まー、とにかく次会った人には余計なこと喋らない！　分かった？　じゃあ仕事始まるから」

花、ため息をつきスマホを降ろす。

花「……私には十年愛した人がいて、死ぬまで一緒にいるつもりだったんだけど」

レンジが鳴る。

花、レンジからマグカップを取り出す。

花「向こうが浮気して、別れたんだけど」

あっくん（22）「休憩もう終わるだろ。テレワークだからってだらけてたら成長しないよ」

あっくん（17）「ココア好きだね～。かわいいね～」

あっくん（13）「いつも飲んでるよね」

花「……今でも妄想で現れるの」

〇コンビニ・店内（夕）

花のスマホが鳴る。
花、スマホを見るとマッチングアプリからの通知。
アプリを開くと、『タイプだったのでいいねしました』とメッセージが来ている。
あっくん（22）の声「花がタイプとか趣味悪いな」
花、ふと横を見ると、あっくん（22）がスマホを覗き込んでいる。
花、あっくん（22）を睨む。
あっくん（22）「睨むなよ。そうやって心情を言語化できないで行動に移すの、悪いとこだよ」
花、レジに向かう。
レジでタバコを補充していた三村龍磨（17）、花に気づく。
龍磨「いらっしゃいませー」
花、レジ台にアイスを置く。
あっくん（22）「またアイス買って。そう

やって無駄な浪費したりするのも悪いとこ」

龍磨「ポイントカードお持ちですかー？」

花「あ、はい」

花、財布を取り出す。

花「えーと……」

財布にはパンパンにポイントカードが詰まっている。

カードを探すのに手間取る花。

あっくん（22）「そうやって取捨選択できないのも悪いとこだし」

龍磨「袋ご利用ですか？」

花「大丈夫です」

龍磨、パーテーション越しに耳を近づけて、

龍磨「はい？」

花、前屈みになって、

花「大丈夫です！」

あっくん（22）「声も腹から出さないと相手に伝わらないよって言ったよね？」

○同・店前（夕）

龍磨の声「ありがとうございましたー」

花・あっくん（22）、出てくる。

あっくん（22）「花のためを思って言ってるんだよ」

花、あっくん（22）を見る。

あっくん（22）「俺は」

○（回想）大学・講義室

あっくん「俺は花のためを思って言ってるんだよ」

リクルートスーツ姿でマスクをしているあっくんと花。

あっくん「俺しか言ってあげれる人いないよ」

花、うなずく。

○（戻って）コンビニ・店前（夕）

店の前で突っ立っている花。

周りには誰もいない。
ため息をついて歩き出す。

○マンション・花の部屋（夜）

ベッドの上で仰向けになりスマホをいじっている花。
スマホ画面はマッチングアプリ。
花、よく見もせずにいいねボタンを連打している。
マッチングアプリから『マッチしました！』の通知。
花、寝返りを打ってだるそうにスマホをいじる。
メッセージを開くと、『歳近いのでいいねしました！　よろしくお願いします』と『ゆう』から来ている。
花、「ふーん」と『ゆう』のプロフィール画面を開く。
目を見開き、

花「あっくん？！」

あっくん（13）（17）（22）「うん？」

一斉に振り返るあっくんたち。

花、プロフィール写真を拡大する。

長い前髪・マスクで写っている

『ゆう』。

どことなくあっくん（22）に似て

いる。

あっくん（22）「うん？」

花「出会っちゃったかもしれない……」

× × ×

かにちゃん（声）「あっくん忘れるために

アプリやってんのにあっくんと似て

る人に会うのは意味無くない？」

花「だってー！　他の人とは会う気にな

れないんだもん。みんな下心見え見え

で」

スマホを耳に当てながら話して

いる花。

鏡の前で前髪を直す。

かにちゃん（声）「それでもいいって思っ
てたくせに。ていうかむしろそういう
人狙ってたよね？」
花「だって……。あっくん以外とキスし
たらその人のこと好きになれると思
ったんだもん」
かにちゃん（声）「じゃあその偽あっくん
とキスできたらいいね」
花「そんなこっちが下心満載みたいじゃ
ん！」
かにちゃん（声）「実際そうでしょ。その
人利用してあっくんのこと忘れよう
としてるんだから」
花「そうだけど……。今度の人はちゃん
と好きになれそうな気がする」
あっくん（22）の声「花には無理だよ」
ハッとする花。
鏡に映り込むあっくん（22）。
あっくん（22）「花はいつも根拠のない自
信を持つのが悪いとこだよ」

花「大丈夫だもん……」

〇駅・改札前

キョロキョロ辺りを見渡す花。

スマホを見ると、『もうすぐ着きます』とメッセージが来ている。

ゆうの声「あの、すみません……」

花、顔を上げる。

と、話しかけてきたゆう（22）と目が合う。

花「はい？」

ゆう「あの、花さん？」

花「え、あ、はい」

ゆう「よかった。ごめんなさいお待たせして。あ、ゆうです」

花「え、あ、あぁー……」

花、ゆうの顔をじっと見る。

あっくん（22）「俺と全く似てな――」

花「（遮って）かっこいいですね！」

ゆう「えぇ？　ありがとうございます」

あっくん（22）「そう思い込もうとしてるんだろ」

ゆう「じゃあ映画館あっちなんで、行きましょうか」

花「はい」

ゆうのあとについて行く花。

あっくん（22）「どうなるかな」

あとをついていくあっくん（22）。

○映画館・劇場

映画が上映されている館内。

花、一つ空いた席の先のゆうをチラッと見る。

耳たぶを引っ張りながら映画に集中しているゆう。

花、「あ」と思うと、二人の間の席にあっくん（22）の姿。

ゆうと同じように耳たぶを引っ張りながら映画を見ている。

○繁華街（夕）

ゆう「いやぁ、ネットで話題になってたからどうかなと思ったんですけど、案外面白い方でしたよね」

花「そうですね」

ゆう「あの映画のテーマでもあった人脈って、俺本当に大事だと思ってて」

花「はい」

ゆう「就活でもやっぱ人との繋がりが重要になってくるなっていうのは感じてますね」

花「就活？」

ゆう「はい。今就活中です。四年なんで。言ってませんでしたっけ？」

花「そう、でしたね。すみません」

あっくん（22）「俺に似てるかどうかしか気にしてなかったもんな」

ゆう「あ、お腹空いてます？　ご飯とか」

ゆう、辺りを見渡す。

が、飲食店はどこも閉まっている。

ゆう「やっぱコロナだからどこもやって
ないかー。どうしよう……」
あっくん（22）「この男、じゃあうちで飲
みませんかって言うぞ」
ゆう「またお昼とかにしましょうか」
花「へ？」
ゆう「今度はランチでも」
花「あ、は、はい」
ゆう「また連絡しますね」
あっくん（22）「また失敗だな」

〇マンション・花の部屋（夜）
かにちゃん（声）「写真詐欺じゃん」
花「でもまぁそんなものかなって」
スマホを耳に当てている花。
かにちゃん（声）「まぁねぇ。アプリだか
らね。また会うの？」
花「もちろん。なんか、いい人そうだっ
たし」
かにちゃん（声）「今日家に誘わなかった

のもなんかポイント高いよね」
花「身体目当てじゃないのかも」
かにちゃん（声）「いいじゃーん」
あっくん（22）「俺以外のこと好きになれるの」
花「……なれるよ。だってね、あの人、あっくんと同じ癖があったの」
あっくん（22）、耳たぶを引っ張る。
花「耳たぶを引っ張るの。集中してるときとか、手持ち無沙汰なとき」
花、微笑む。
花「それがすごく愛おしいの」

○アパート・ゆうの部屋（夜）
ベッドの脇に体育座りしている
花。
あっくん（22）「結局家じゃん！　夜じゃん！」
ゆう「すみません、遅くなっちゃって。ゼミで大学行かなくちゃいけなくな

って」

花「大変ですね」

ゆう「今就活もなんで、結構やばいっす」

机の上には自己啓発本が積んで

ある。

花「あ」

花、本を一冊手に取る。

ゆう「それ読んだことあります？」

花「知り合いが、読んでた」

ゆう「結構タメになりますよ。まぁ俺思

うんですけど、結局情報量多い奴が勝

ちじゃないですか？　あとはどんだ

け効率良く動けるかどうか。コロナが

無ければ本来俺は」

○（回想）アパート・あっくんの部屋

机の上には自己啓発本の山。

あっくん（22）、付箋だらけの本を

手に取り、

あっくん「花も本読んだ方がいいよ。ネ

ットばっかじゃなくてさ。このページにも書いてあるんだけど」

履歴書を書いていた花（22）、あっくんの横顔を見つめる。

○（戻って）アパート・ゆうの部屋（夜）

ゆう「花さん？」

ハッと我にかえる花。

気づくと目の前にはゆうの顔。

ゆう「家の中なんで、マスク、取ったら？」

ゆう、自分のマスクに手をかけ、花の耳にも触れようとする。

が、避ける花。

花「お、お酒とか買いに行きましょうか！」

ゆう「いいですね」

○住宅街（夜）

コンビニ袋を下げ並んで歩く花とゆう。

ゆう「花さんて何でアプリやってるんですか？」
花「えっと、出会いなくて」
ゆう「へぇ。可愛いのに」
花「えぇ」
ゆう「彼氏どれくらいいないんです？」
花「一、二ヶ月とか」
ゆう「ふーん。何で別れちゃったんですか」
花「浮気、されて」
ゆう「え、やば。現場見たとか？」
花「アプリ、やってたんです」
ゆう「マッチングアプリ？」
花「はい。アプリの通知見えて、調べてみたらそういうので。試しに登録してみたら、いて」
ゆう「うわー、アプリで遊んでたんだ」
花「彼は、メッセージやり取りしてただけで会ってないから」
あっくん（22）「浮気じゃないよ」

花「浮気じゃないって」

ゆう「浮気じゃなくない？」

花「え？」

ゆう「え、だって会っては無かったんでしょ？」

花「ま、まぁ」

ゆう「じゃあ浮気じゃないでしょ～。花さん厳しすぎ」

花「え……」

〇アパート・ゆうの部屋（夜）

入ってくる花とゆう。

ゆう「まぁ三年は会社員やって、仲間内で起業しようかなって」

花「あはは……」

ゆう「他の奴は公務員だとか言ってますけど、そうじゃないだろって。俺言ってやったんです。いつまでも組織にいるようじゃ人として成長できないって」

花「へぇ……」

ゆう「俺だけですよ。そんなこと言ってやれんの」

花「……今内定いくつあるの？」

ゆう「え。あー、えーとまぁ本命のは選考これからなんで」

×　×　×

（フラッシュ）

リクルートスーツ姿のあっくん

（22）。

あっくん「しょうもないとこの内定もらってもあれだし」

×　×　×

ゆう「他のやつみたいに何も考えずただ就活ってわけじゃないんですよ。これから先の設計を見据えて」

花「自己分析は済んだ？　自分の強みもメモ見ずに言える？」

×　×　×

（フラッシュ）

あっくん「面接のその場の流れっていうか空気もあるから」

×××

花「その本、全部読んだの？」

×××

（フラッシュ）

机の上に積まれた自己啓発本の山。

一冊だけに付箋が貼ってある。

×××

ゆう「まずは一冊熟読した方が身になるんすよ」

花「……」

ゆう「花さん？　どうしたんですか」

花「何で浮気じゃないって言うの」

ゆう「え、もしかしてさっきの怒ったんですか？」

花「だってマッチングアプリだよ……」

花、うつむく。

花「私がいるのに。他の人と出会う必要

ある？」

ゆう「……傷ついたんだね」

ゆう、花の頭を撫でる。

×　×　×

（フラッシュ）

花の頭を撫でるあっくん（22）。

×　×　×

ゆう、花の耳に触れ、マスクを外す。

ゆうを見上げる花。

ゆう、自分のマスクを外す。

ニヤッと歯を出して笑うと矯正器具が見えた。

花「あ……」

ゆう、花にキスしようとする。

が、咄嗟に避ける花。

ゆう「は？」

花「ごめんなさい！」

花、慌てて出て行く。

○住宅街（夜）

スマホを耳に当てて歩いている

花。

かにちゃん（声）「帰って来ちゃったの？」

花「だってなんかキモかった！　マスク取ったら全然あっくんと似てない

し！　なんかね、読めない癖に自己啓発本持って偉そうにして、理想とプライドばっか高くて！」

かにちゃん（声）「就活の時期に現れる、友達少なくなる奴じゃん」

花「そうなの！　なんかイライラした！」

かにちゃん（声）「まぁまぁ。あっくんもそんなもんだったじゃん」

花「え？」

かにちゃん（声）「顔は似てなかったかもだけど、中身は就活のときのあっくんそっくりじゃん」

花「そんなことないよ」

かにちゃん（声）「姿重なったんじゃない

の？」

花、振り返る。

が、誰もいない。

辺りをキョロキョロ見渡しても

誰もいない。

○マンション・花の部屋

ベッドに寝転がってスマホをい

じる花。

スマホ画面にはアプリの退会ペ

ージ。

深くため息をつき、退会ボタンを

押す。

あっくん（17）「花たん」

あっくん（17）、花に寄り添って寝

転ぶ。

あっくん（17）「俺は花たんの笑ってる顔

が好きだよ」

花、そっぽを向く。

○コンビニ・店内（夕）

花、入ってくる。

品出しをしていた龍磨、気づいて、

龍磨「いらっしゃいませー」

花、アイスを手に取りレジに向かう。

龍磨、レジに入る。

龍磨「ポイントカードお持ちですかー？」

花「あ、はい」

花、カードでパンパンの財布を取り出す。

花「えーと、あ、はい！　お願いします」

花、カードを差し出す。

龍磨、受け取りレジに通す。

龍磨「あ、ポイント貯まりましたよ」

花「えっ」

龍磨「くじ一回引いてください」

龍磨、くじ箱を花に差し出す。

花、くじを引き龍磨に渡す。

龍磨「おめでとうございます。コーヒー

缶当たりました」

花「え、やった」

龍磨「毎回コツコツ貯めてきてよかったですね」

花「え？」

龍磨「いつもご利用ありがとうございます」

花「えへへ」

龍磨「なんか仕事でもひと段落したんですか？」

花「え？」

龍磨「肩の荷降りたって顔してるから」

花「あ、あぁ……」

花、チラッと横を見る。

そこには誰もいない。

龍磨「すみません急に話しかけて。俺もうすぐ上がるんで店の前で待っててもらえませんか？」

花「へ」

入店音。

龍磨「いらっしゃいませー」

○同・店前（夕）

アイスを齧っている花。

あっくん（17）「花たん？　顔赤くない？」

黙々とアイスを食べる花。

あっくん（17）「さっきの男、ナンパかなぁ。なんかチャラそうだったし、ついていかないよね？　そりゃいつも接客態度いいなとは思ってたけどさ？」

あっくん（17）、花の目の前に立って、

あっくん（17）「花たんはそんな軽い女じゃないもんね？」

花「……藁にもすがる」

龍磨の声「わら？」

ハッとして振り返る花。

ブレザー服姿の龍磨。

ギターケースを背負っている。

花「え」

龍磨「お待たせしました」
花「こ、高校生？」
龍磨「そうですけど」
花「あ、あぁ……」
龍磨「あの、今彼氏とか」
花「へ？」
龍磨「やっぱいますよね」
花「いない、です」
龍磨「じゃあ俺にもチャンスあるってこ
とですね」
あっくん（17）「は？」
花「えっ！　いや、その」

○マンション・花の部屋（夜）
かにちゃん（声）「堕ちるとこまで堕ちた
か」
花「いやさすがに未成年は無理だよ？」
スマホを耳に当てている花。
花「でもなんか素直な子ぽかったし、無
碍にはできないっていうか」

かにちゃん（声）「ちょっとかっこよかったんでしょ」

花「……うん。ちょっとあっくんに似てた」

○（回想）高校・音楽室

エレキギターをアンプに繋げずに弾いているあっくん（17）。

机に座ってじっと見つめる花（17）。

あっくん「今度花たんのために曲書くからね」

花「嬉しい！」

花、あっくんの背中に抱きつく。

イチャつく二人。

○（戻って）駅・改札前（夜）

辺りをキョロキョロ見渡す花。

龍磨の声「花さーん」

花、振り返るとギターケースを背

負った龍磨が走ってくる。
龍磨「来てくれてありがとうございます」
花「いえ……」
龍磨「じゃあ、あっちです」
並んで歩く花と龍磨。
花「ストリートライブなんてすごいね」
龍磨「今ライブハウスとかでやれなくて。部活も全然できないし。路上しかないんです」
花「そっかぁ」
龍磨「花さん部活何やってたんですか？」
花「帰宅部」
龍磨「へぇー。何も？」
花「うん」
龍磨「楽しいですよ、軽音。やればよかったのに」
あっくん（17）「俺との時間を優先したんだよね」
花「ギター、やってるの？」
龍磨「はい。バンドではギターボーカル」

×　×　×

（フラッシュ）

エレキギターを弾くあっくん

（17）。

×　×　×

花「そう……」

○商店街・路上（夜）

アコースティックギターを肩に

かけ、チューニングしている龍磨。

花、少し離れたところで辺りをキ

ョロキョロ見渡している。

しゃがんで龍磨を見つめている

女の子たち。

花、スマホを見るフリをしたり気

まずそうにする。

龍磨「えー、集まってくれてありがとう

ございます。まぁこんな世の中なんで、

暗い気持ちになると思うけど、歌って

いうのは世界共通なんで。少しでも一

つになれたらなと思って、この曲を
歌います」
まばらに起こる拍手。
花、慌てて拍手する。
龍磨、歌い出す。
花「あ……」
あっくん（17）「俺もこの曲歌ったことある」
あっくん（17）、花の横に立つ。
あまり上手くない龍磨の歌声に
うっとりしている女の子たち。
花、その様子を見て眉をひそめる。
龍磨、花をチラチラ見ながら歌う。
一人の女の子、花の方を向き睨む。
慌てて視線を逸らす花。
× × ×
龍磨「どうでした？」
花「知ってる、曲だった。ちょうど高校生の時流行った曲」
龍磨「俺結構好きなんですよねー」

女の子「龍磨ー、またねー」
龍磨「おいっすー。ありがとねー」
女の子たち、龍磨に手を振って歩いていく。
振り返って花の全身をじろっと見る。
慌ててうつむく花。
龍磨「あれ花さんを思って歌ったんですよね」
花「へ、へぇ……」
龍磨「俺今はまだ勉強中なんですけど曲も書いてて。世界平和とかそういうメッセージを伝えたくて」
花「す、すごいねぇ」
龍磨「花さんへの気持ちも、歌にしようと思ってます」
花「え、えっと……」
龍磨「歳下だから、そういう対象に入りづらいのは分かってます。でも、俺誰よりも花さん幸せにする自信あるん

で。初めてバイト入ったときから、運命感じてたんで」
あっくん（17）「花たんの運命の相手は俺だよね？　ね？」
花「か、考えさせてください……」

○マンション・花の部屋
かにちゃん（声）「考えるのも何も未成年はダメでしょ」
スマホを耳に当てている花。
花「分かってるけどー。なんかまっすぐな思いをぶつけられると……。どうしていいか」
かにちゃん（声）「そこは、はっきり断って次行かせてあげなきゃ。それが大人」
花「そうだよねー」
かにちゃん（声）「曲なんか作る前に早めに」
花「うん……」

かにちゃん（声）「そういえば高校のとき
さぁ、あっくんが誕生日プレゼントに
オリジナル曲作って来たことあった
よね」
花「あ、あった……」
かにちゃん（声）「愛だの君を守るだの、
メロディーに乗せた途端軽くなるの
何でだろね。だからみんな歌うんだろ
うね」
エレキギターを担いだあっくん
（17）、弾いて、
あっくん（17）「♪ラブリーフラワー」
花「（遮って）嬉しかったもん！」
かにちゃん（声）「とにかく、現実を知ら
ないお子様に何心惑わされてんのよ」
あっくん（17）「花たん、俺は一生、世界
中が敵になっても花たんを守るよ」
かにちゃん（声）「誰かに幸せにしてもら
うのは難しいって、もう分かってるで
しょ？」

○コンビニ・店内（夕）

龍磨「いらっしゃいませー」

花、入ってくる。

龍磨「いらっしゃいませ」

花、適当にデザートを取ってレジに置く。

龍磨「温めますか？」

花「い、いやぁ……」

龍磨「あはは」

花「あ、あの、少し話が」

龍磨「俺もうすぐ上がりなんで待っててください」

花「は、はい……」

○コンビニ・店裏（夕）

そわそわしながら待っている花。

龍磨の声「お待たせしました」

花、振り返ると、エレキギターを肩にかけた龍磨、立っている。

龍磨「アコスティは今兄貴に貸してて。
すみません」
花「い、いえ？」
龍磨「花さんへの思いを歌にしました」
花「も、もうできたの？」
龍磨、ギターを弾いて、
龍磨「♪一目惚れだよ～。素敵なその花
びらに～」
あまりうまくない。
花、どうしていいか分からず、リ
ズムに合ってない手拍子をする。

○（回想）高校・音楽室
エレキギター片手に歌っている
あっくん（17）。
戸惑いながら手拍子する花（17）。
曲調が変わるので手拍子しづら
い。

○（戻って）コンビニ・店裏（夕）

龍磨「♪フォーエバー」

花、弱々しく拍手する。

龍磨「……俺音楽で食っていこうと思ってるんで、この曲が第一号になりますね」

花「あは、あはは……」

龍磨「歳下とかなしにして、考えてくれませんか？　俺絶対幸せにするし」

×××

（フラッシュ）

エレキギターを担いだあっくん

（17）。

あっくん「♪フラワー守るよ〜」

×××

龍磨「笑顔にするし」

×××

（フラッシュ）

あっくん「♪その笑顔はひまわり〜みたい〜」

×××

龍磨「一生守るんで！」

×　×　×

（フラッシュ）

あっくん「♪君を守るよ～」

×　×　×

花「何から？」

龍磨「へ？」

花「何から守るの？」

龍磨「え、それは……悪い人から？」

花「そういうときは警察呼ぶよ。私は違うものから守ってほしいの」

龍磨「ち、違うもの？」

花「孤独で寂しい夜とか、具合悪いけど休めない朝とか」

龍磨「は、はぁ……」

花「でもそれ分かんないでしょ？」

首を傾げている龍磨。

花「大人になったら分かるよ」

女の子の声「龍磨ー」

路上ライブに来ていた女の子、歩

いてくる。

花に気づいて、じろじろ見る。

女の子「（視線は花に向けたまま）バイト終わる頃かなーって、来ちゃった」

龍磨「あ、あぁ……」

花「それじゃあ」

花、女の子と目が合う。

睨みつける女の子。

花「……大人になったら分かるよ」

花、歩いていく。

○住宅街（夕）

一人で歩いている花。

立ち止まり、振り返る。

周囲には誰もいない。

花「……」

○マンション・あっくんの部屋

花、エコバッグを下げ入ってくる。

花「ただいまー」

花、キョロキョロと辺りを見渡す。

花「あっくんー？」

花、机の上のヘアゴムを見つける。

花「え」

花、洗面所に向かう。

クレンジングオイルが置いてある。

花「あっくん？」

花、ベッドに向かう。

と、男物のスウェットと女物のパジャマが乱雑に置いてある。

花「あっくん」

過呼吸気味になる花。

○マンション・花の部屋（深夜）

花「あっくん！」

バッと目覚める花。

息が上がっている。

花「（息切れしながら）夢……」

辺りをキョロキョロ見渡す。

が、誰もいない。

花「あっくん……」

×　×　×

スマホを耳に当てている花。

花「あっくんたち消えちゃった」

かにちゃん（声）「良かったじゃん。いつまでも目線に入ってちゃ辛いままでしょ」

花「辛くてもいい。あっくんが原因だったら私は一生苦しみたい」

かにちゃん（声）「早く忘れたいと思ってるくせに」

花「そんなことない」

かにちゃん（声）「あっくんのことそんなに好き？」

花「うん」

かにちゃん（声）「最低な浮気野郎でも」

花「あっくんが言う通りあれ程度は浮気じゃないのかも……」

かにちゃん（声）「浮気でしょ。だって彼

女いるのにマッチングアプリする必
要ないもん」
花「でも会ってないって」
かにちゃん（声）「本当にそれ信じてる？
何回か連絡つかない夜あったよね？」
花「あっくんも忙しくて」
かにちゃん（声）「忙しくてもスタンプく
らい返せるよね？　一秒で済むんだ
から」
花「でも」
かにちゃん（声）「だいたい浮気するよう
な人ってさ、惨めなんだよね。たった
一人とすら真剣に向き合えないなん
て。うっすい人生」
花「あっくんのこと悪く言わないで」
かにちゃん（声）「あんたも惨めだよね。
結局あっくんにとってその程度だっ
たっていうことだもんね」
花「やめて」
かにちゃん（声）「あっくんの妄想まで見

てさ、そんなに未練あるの？　惨めねぇ」

花「やめてよ」

かにちゃん（声）「それってただの執着じゃない？　あっくんにあっさり捨てられて、今までの十年が無駄になることが怖いんでしょ」

花「やめて！」

花、スマホを床に投げつける。

荒い気遣いの花。

床に投げ捨てられたスマホ。

が、その画面は真っ暗。

○（回想）中学校・教室

わいわい盛り上がってる女子グループ。

女子「ねぇあと誰誘う？」

女子「うーん、そうだなぁ」

女子「あ、西崎さんは？」

隅の席でうつむいている花（13）。

女子「あの子はいいよ。彼氏の話しかしなくてうざいもん」
女子「何それキモー」
女子「キャハハ」
花、携帯を手に取る。
番号は押さずにただ携帯を耳に当て、
花「……かにちゃん？」
花の机の上には電話を持ったかにのキャラクターが描かれたペンケース。

○（戻って）マンション・花の部屋（夜）
息が上がっている花。
花「かにちゃん……」
あっくん（13）の声「花ちゃん」
花、振り返る。
と、あっくん（13）が立っている。
あっくん（13）「花ちゃんはひとりぼっちだね」

花、必死に首を横に振る。
あっくん（13）、花の頬を撫でる。
あっくん（13）「花ちゃんには俺しかいないよ」
花「……あっくん」
あっくん（13）の姿が消えている。
暗がりの中、一人の花。

○コンビニ・店前（夕）
花、入ろうとする。
が、直前で引き返す。

○住宅街（夕）
花「あー、疲れた……」
レジ袋を下げて歩いている花。
隣を見るが、誰もいない。
花「……」
花、ため息をつき、とぼとぼ歩く。
斗真の声「花ちゃん？」
花、声のした方を向く。

学ラン姿のあっくん（13）立っている。

花「あっくーー」

花、瞬きをすると、立っていたのは髙橋斗真（13）だった。

斗真「花ちゃんですよね？」

花「え」

斗真「あ、俺児童館通ってた髙橋ーー」

花「斗真くん？　斗真くんだ！」

花、斗真に駆け寄る。

斗真「お久しぶりです」

花「久しぶりー！　コロナで全然会えなかったもんねー。もう中学生か」

斗真「はい。今、一年」

花「そっかそっかぁ！」

○公園（夕）

花「はい」

花、缶ジュースを斗真に渡す。

斗真「あざーっす」

花「あはは」

ベンチに並んで座る二人。

花「中学は？　楽しい？」

斗真「勉強むずい」

花「まぁそうだよねー。部活は？　入ったの？」

斗真「サッカー部」

花「サッカーかぁ！」

斗真「まぁ全然できてないけどね。休校になったり短縮授業なったり」

花「そっか……。せっかく入ったのにね。友達は？　できた？」

斗真「同じ小学校だったやつ何人かと、あとは違う小学校だったやつも。仲良いよ。クラス全員」

花「うんうん」

斗真「あとは浩太も同じクラス」

花「浩太くん！　懐かしいなぁ」

斗真「野球部」

花「そっかぁ。野球チーム入ってたもん

ね。そっか、そっかぁ……」

花、うつむく。

花「学童バイトやってたときが一番楽しかったな」

斗真「仕事楽しくないの？」

花「リモートだしね。なかなか……。って私の話はいいから！　ねぇねぇ」

花、斗真の顔を覗き込んで、

花「好きな子できた？」

斗真「は、はぁ？　いねぇし！」

花「あ、いるなー」

斗真「う、うるさいなー」

グビグビジュースを飲む斗真。

斗真「別に好きとかじゃねーし。よく話すってだけで」

花「へぇ〜？　どんな子」

斗真「……テニス部」

花「ふんふん！」

斗真「なんか三年に兄弟いるって」

花「へぇ！」

斗真「いつも使ってる除菌スプレーがなんか匂いついてるやつみたいで、なんか、いつもいい匂いがする……」

花「へえ？」

斗真「う、うるさいなぁ」

花「その子のどんなとこが好き？」

斗真「だから好きとかじゃ」

花「（笑って）はいはい」

斗真「……この前、家庭科の調理実習でホットケーキ作ったんだ」

花「うん」

斗真「二人一組なって」

花「その子とペア？」

斗真「うん」

花「いいじゃーん」

斗真「まぁ二人一組で一人一枚ずつで焼いたんだけど」

花「うん」

斗真「うまく焼けた方を俺のお皿に載せたんだ、その子。ちょっと焦げた方は

自分のに載せて」

花「優しいね」

斗真「うん。優しいんだよ。普通さ、自分はいい方食べない？」

花「うん、そうだね」

斗真「どっちもその子が焼いたんだけど、一回目火加減間違えたからって自分が焦げたやつ食べたんだ」

○（回想）アパート・あっくんの部屋

台所に立つあっくん（22）と花（22）。

あっくん「ほんと花は不器用だな」

花「えへへへ、ごめんごめん」

フライパンの上には目玉焼き二つ。

どちらも不恰好だが一つは黄身まで崩れている。

花、目玉焼きを皿に盛り付けテーブルに運ぶ。

あっくんの前にはきれいな目玉
焼き。
花の前には崩れた目玉焼き。

○（回想）ファミレス・店内
テーブル席に向かい合って座る
ブレザー姿のあっくん（17）と花
（17）。
テーブルの上にはチキン。
花「私二個でいいからあっくん三個食べ
て」
あっくん「腹減ったー。いただきます！」
おいしそうにチキンを頬張るあ
っくん。
花、微笑む。

○（回想）住宅街
並んで歩く制服姿のあっくん（13）
と花（13）。
花、肉まんを半分に割る。

大きさがバラバラになった。
花、大きい方をあっくんに差し出して、
花「はい」
あっくん「ん」
あっくん、肉まんを受け取る。

○（戻って）公園（夕）
花「うん……」
斗真「それで俺、この子に焦げてないホットケーキ食べさせてあげたいって思ったんだ」
花「え？」
斗真「うまく焼けてるだけじゃなくて、フルーツとか生クリーム乗ってて。女の人よく食べてるじゃん」
花「うん」
斗真「そういうの食べさせたいなって。お腹いっぱい」

○（回想）アパート・あっくんの部屋

向かい合って座っているあっくん（22）と花（22）、

それぞれの前にはホットケーキ。

あっくん、口の端に生クリームを付けている。

それを愛おしそうに見つめる花。

あっくんのは生クリームたっぷりで飾り切りされたフルーツも乗っている。

花の前には、薄く生クリームが塗られ、飾り切りした残骸のフルーツが乗ったホットケーキ。

○（戻って）公園（夕）

花「そう……」

斗真「あー！　俺キモキモ！　やば！」

花「やばくないよー。キモくないし」

斗真「そうかな」

花「うん。そう思ってもらえて、その子

も嬉しいと思うよ」

斗真「そうかなぁ」

花、チラッと隣を見ると、あっくん（13）、座っている。

花「私だったら幸せだもん」

○住宅街（夕）

花「じゃあ勉強がんばってね」

斗真「はーい」

花「斗真くんならできるよ」

斗真「がんばってみる」

花「うん。じゃあまたね」

斗真「あ、ねぇ花ちゃん」

花「うん？」

斗真「あのー、そのー、別に俺がとかじゃないんだけどさ」

花「うん」

斗真「中学で付き合うとか早いと思う？」

花「うーん……」

○（回想）中学校・教室

机を運んできて、隣同士になった

あっくん（13）と花（13）。

お互い目が合って、

あっくん「あは、よろしく」

花「よろしくお願いします」

× × ×

あっくんと花しかいない教室。

あっくん「花ちゃん、俺と付き合ってください」

花「……私も好きです」

× × ×

机でノートに書き込んでいる花。

花とあっくんの相合い傘を書いている。

『西崎花』と書いて、『西崎』を消しゴムで消す。

ニコニコ楽しそうな花。

○（戻って）住宅街（夕）

花の隣にはあっくん（13）が立っている。

花「……早いかもね」

○マンション・花の部屋（夜）

電気がついてない真っ暗な部屋。

花、スマホで電話をかけている。

部屋に呼び出し音が響く。

花「（電話が繋がって）もしもし」

花、ゆっくり呼吸をして、

花「会いたいの。あっくん」

○駅・改札口（夕）

うつむいている花。

あっくんの声「花」

花、顔を上げると、あっくん（23）、

向かってくる。

マスクをしていてもクマが目立

つ。

あっくん「久しぶり」

花「うん」
あっくん「飯でも食いに行く？」
花「ううん」
あっくん「俺昼食ってないんだよね。忙しくて」
花「え、そうなの？　じゃあ」
花、辺りをキョロキョロ見渡す。
あっくん「とりあえず何か腹に入れていい？」
花「うん」

〇ファーストフード店・店内（夜）
ハンバーガーにがっつくあっくん。
無精髭が生えている。
花「……お仕事忙しい？」
あっくん「え？　あー、まぁね。結構業務任されてるから」
花「そっか……」
あっくん「花の方は？」

花「私はリモートワークだから逆にやることなくて暇で」
あっくん「出たリモートワーク」
あっくん、鼻で笑って、
あっくん「それだと絶対成長しないでしょ。だらけるし、すぐ上司に相談できないし。やっぱ現場で働かないと」
花「そう、だね」
あっくん「俺はずっと出社だね。休日出勤とかも。まぁ、あるにはあるかな……」
あっくん、ハンバーガーを食べる。
花「そっか」
あっくん「うん」
花、ストローの袋をいじる。
あっくん「今日って何だったの」
花「あ、うん。えっと……」
花、うつむく。
あっくん、ジュースを飲む。
花、チラッとあっくんを見ると、

耳たぶを引っ張っている。
あっくん「うん？」
花「……ううん。元気かなって」

○公園（夜）
並んで歩いている花とあっくん。
あっくん「彼氏できた？」
花「へ？」
あっくん「できたの？」
花「できないよ……」
あっくん「そう」
花、あっくんをチラッと見る。
あっくん「俺も」
花「えっ」
あっくん「仕事忙しくてそんな暇ないしね」
花「……そう」
あっくん「……ちょっと座ろうか」
あっくん、ベンチに座る。
花、少し間を開けて隣に座る。

あっくん「大学のやつとかどうしてんのかな。結局最後の一年まともに会えなかったし」

花「さぁ……」

あっくん「あ、花は友達いないもんな」

花「……うん」

あっくん、花の肩を抱き自分の方に引き寄せる。

あっくん「あーあ。コロナで外食もできないし旅行もできないし」

花「……そうだね」

あっくん「花実家帰ってる？」

花「ううん」

あっくん「だよなー。ほんと、嫌な世の中になったもんだよ」

花「うん」

あっくんと目を合わせない花。

あっくん、咳払いして、

あっくん「花、俺たちやり直さない？」

花「え？」

あっくん「やっぱさ、俺花じゃないとダメだ」

あっくん、花の手を握る。

あっくん「俺ほんとバカだったよ。でも分かって？　男はさ、ちょっと遊びたくなる生き物っていうか」

花「……」

あっくん「これからは絶対しない。約束する」

あっくん、花の目を見つめる。

あっくん「信じて」

花、目を逸らす。

あっくん「ほら、俺らお互いのこと嫌いになって別れたわけじゃないじゃん？　ねっ？　花だってまだ俺のこと好きっしょ？」

花「あっくん……」

あっくん「じゃあまた付き合えばいいじゃん。そうしようよ。花だってこのご時世出会いないでしょ。だったらまた

より戻せばいいじゃん」
花、あっくんの手を振り解く。
あっくん、ため息をついて、
あっくん「花？　まだ怒ってるの？」
花「怒っ、てるというか」
あっくん「もう俺らも大人じゃん？　花にもちゃんとしてほしいんだよね」
花「ちゃんとって？」
あっくん「ちょっとしたことですぐ浮気だとか何だとか騒がないでさ」
花「ちょっとしたこと……？」
あっくん「そうじゃないとうまくやってけないよ？　ね？」
花「でも……」
あっくん「俺じゃないと無理だよ」
あっくん、花の手を握る。
あっくん「花は俺じゃないと幸せになれなよ？」
花「……」
あっくん「ね？」

花「……うん」
あっくん「うん。（笑って）やっぱ花は俺がいないとダメなんだなぁ」
×　×　×
（フラッシュ）
学ラン姿のあっくん（13）。
あっくん「だからさ――」
×　×　×
花「――やっぱ無理」
花、あっくんの手を振り解く。
あっくん「は？」
花「ちょっとしたことじゃないの」
あっくん「何が？」
花「あなたがしたことは、ちょっとしたことじゃないの。すごくひどいことなの」
あっくん「何。やっぱまだ怒ってんの？」
花「怒ってるんじゃないの。悲しいの」
あっくん「俺もちゃんと説明しなかったのが悪かったね。だからさ、あれはた

だの友達作りで」

花、うつむく。

手が震えている。

花「友達作りたいんだったらわざわざマッチングアプリやることないと思うの。何で斜め上から撮った写真アイコンにしてるの？　何で年収嘘ついてるの？　何で彼女いるって書いてないの？」

花の目から溢れた涙が膝に落ちる。

あっくん「何、俺には友達作るなって？　そこまで束縛するの？」

花「彼女いるのに他の女と仲良くする意味って何？」

あっくん「だからさぁ……。花には男友達いないから分からないんだよ。女友達は別に浮気じゃないし」

花「浮気じゃん！」

あっくん「それはお前の価値観だろ？

押し付けんなよ」

あっくん、舌打ちをして、

あっくん「何回話し合ったの、これ。花は世界が狭すぎるんだよ」

花「……」

あっくん「もっと広い視点で見ないとさぁ。これから先もいろんなところで困るよ？」

花「……」

花、あっくんの目を見る。

花「何で名前星輝にしたの？」

あっくん「何」

花「アプリの名前」

あっくん「それは……。なんかあれだよ、プライバシーのさ！　本名だといろいろ怖いじゃん？　アプリやってる人みんなそうだよ！」

花「どうして星輝だったの？　何で……」

あっくん（13）の声「花ちゃん」

花の隣に腰掛けるあっくん（13）。

あっくん（13）「俺産まれたとき名前の候補二つあってさ」

○（回想）公園

ベンチに腰掛けている制服姿のあっくん（13）と花（13）。

あっくん「父ちゃんは敦彦って付けたくて、母ちゃんは星輝って付けたかったんだって」

花「へぇ！　じゃあ、あっくんはほっくんだったかもしれないってこと？」

あっくん「（笑って）そうだね。でもばあちゃんに反対されたらしい。今どきすぎるって」

花「ほしき？」

あっくん「星に輝く」

花「あー……。なんかアニメの主人公みたい！」

あっくん「かっこいいよね。だからさ」

○（戻って）公園（夜）

あっくん（13）「子どもの名前、星輝にしてもいいかな」

花、目を潤ませてあっくん（13）を見つめる。

あっくん（13）「ちょっと珍しいかもしれないけど、星輝でもいい？」

花「……（ぼそっと）うん」

あっくん「花？」

花「星輝……」

あっくん「だから別にやましい気持ちがあったとかじゃなくて個人情報だからさ。別に深い意味ないよ」

花「そう、だよね」

あっくん「そうだよ」

花「あっくんにとってはなんでもない名前だもんね」

花、立ち上がる。

花「よく分かった」

あっくん「花？」

花「もうあっくんとは無理」
あっくん「は？」
花「バイバイ」
花、歩き出す。
あっくん「ちょっと待ってよ！」
あっくん、花の腕を掴む。
あっくん「何で勝手に決めてんの？　もっとちゃんと話し合おうよ」
花、首を横に振る。
花「話し合っても無理なことなの」
あっくん「何でそんな……。花、泣いてんじゃん」
花、手で涙を拭く。
あっくん「まだ俺のこと好きなんでしょ？」
花、前を向くとあっくん（13）が立っている。
真っ直ぐ花を見つめるあっくん（13）。
花「好き。あっくん、大好き。大好きな

の」
あっくん「俺だって好きだよ」
花、あっくんの目を見つめる。
花「だったら何で？」
あっくん、頭をかいて、
あっくん「だから」
花「ずっとその疑問は消えないよ。これから先、ずっと一緒にいたって」
花、あっくんの手を振り解き歩いていく。
うつむくあっくん。
どんどん歩いていく花。
あっくん、顔をあげ花の背中に向かって、
あっくん「――俺以外とじゃ幸せになれないよ！」
立ち止まる花。
あっくん「無理だよ……」
花「いいよ！」
花、振り返って、

花「あなたといたらもっと泣かされる」
花　、微笑んでまた歩き出す。
○（回想）大学・講義室
リクルートスーツを着たあっくん（22）と花（22）、向かい合って座っている。
机の上には就活雑誌と不動産の雑誌。
あっくん「ここ受かれば同じ路線沿いに住めるよ」
花「ほんと？」
あっくん「花はー……電車通勤でもいい？」
花「うん大丈夫」
あっくん「ここだったら駅近でいいんじゃないかなって」
○（回想）高校・教室
ギターを抱えているあっくん（17）

とそれを見つめる花（17）。
あっくん「子どもとセッションとか楽しそうだなぁ」
花「何人いればいい？」
あっくん「ドラムとベースとキーボードと……。三人？」
花「多い！　キーボード私やるよ！」
あっくん「（笑って）じゃあ二人でいいよ」

○（回想）中学校・教室
窓際から並んで外を眺めている
あっくん（13）と花（13）。
あっくん「俺花ちゃんとずっと一緒にいる気がするなー」
花「……私も」
花（23）、あっくんの目の前に来て、
花「私もよ」

○（戻って）公園（夜）
花「私もだったのよ」

花の目の前には誰もいない。

花「さよなら、あっくん」

○駅・改札口

スマホで電話している花。

花「うん。うん。ありがとね話聞いてくれて。同期とこんな友達になれると思ってなかったよー。うん、また出社のときにね」

花、スマホを降ろす。

スマホには通話画面。

通話が切れる。

彼氏の声「花！」

花、顔を上げる。

こっちに向かって歩いてくる彼氏。

花、手を振る。

○商店街

彼氏と手を繋いで楽しそうな花。

彼氏「ねぇ」

花「うん？」

彼氏「花は今までどんな人と付き合ってたの？」

花「え？」

彼氏「前はどんな恋愛してたの？」

花「気になる？」

彼氏「花のこと知りたいんだよ」

花「うーん……」

花、空を見上げる。

花「私には十年愛した人がいて、死ぬまで一緒にいるつもりだったんだけど……」

花、にっこり笑う。

花「超きしょい奴だった！」

【終】